

---

# バカと絆と召還獣

Wagtail

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと絆と召還獣

### 【Nコード】

N3590BA

### 【作者名】

W a g t a i l

### 【あらすじ】

文月学園に侍がやってきた！！

しかし、その侍は明久の幼馴染でなんだかいろいろ過去があって・  
。。  
侍ははたしてFクラスでうまくやっていけるのか!?

〜出会い〜

俺たちが入学して二度目の春が訪れた。

文月学園に続く坂道の両端には新入生を迎える課のように桜が咲いていた。

その桜の下に、

「は〜、やっぱりきれいだな〜」

この俺、時風遥生ときかぜはるながいた。

俺は、今日から文月学園の二年に編入する。

クラスはまだ聞いてないけど、確実にFクラス。

理由は振り分け試験を引越しのごたごたで忘れていたから。

どんだけうつかりしてたんだよ俺……。

ま、クラスなんてどこでもいいけどさ……。

しばらくゆっくりと歩いていると、ひととき大きな桜の下に人が集まっていた。

「ねえ、君俺…ちと…こ…行か…い？」

「俺た…金持っ…っから、な…か奢って…るよ」

「いき…せ…、放し…くだ…い！」

なんだ、…………ナンパ…………？

小説の中だけだと思ってたけど身近にあるんだな…………。

「あんたら、ナンパですか？ いやがってますよ、放してやったらどうですか？」

「うるせえ、邪魔だ！ 関係ないやつは引っ込んでろ!!」

その木の下には、不良の模範のようなやつらと……………美少女がいた。

「…………かわいい…………」

「おい、邪魔だ！どけ！！」

正直見とれていた……。

「おっと……。あなたたちよつてたかって……。虫ですかってんだ？」

「うるせえ！ あれがない間に……。おい、邪魔だと言ってんだろ！！」

男の一人が、その女の子の腕をつかんで連れて行くこうとする。

「痛い！ 放して！ 助けて！！」

荒事は嫌いだが、もうこれは……。見逃せない。

「あんたら、今すぐ土下座して謝れば、この人しだいだが逃がしてやれないこともない。けどできないなら……。入院する……。？」

「あ？ 何ヒーロー気取りやってんだこいつ？」

「ほっとけ、行くぞ！！」

「……いいんだな………？」

俺はその女の子をつかんでいた男の腕をつかみ、握力で砕いた。

「ん、ぐわっ！？」

男は悲鳴を上げ、気絶した。

「……さて、次は誰が入院したい？」

「テメエ、よくもヤスオを！」

「ぶっ飛ばしてやる！！」

俺は左右から同時に襲ってきた二人をかわし、それぞれの鳩尾みぞおちと首筋に一撃入れて衝天させた。

「まったく……、大丈夫か？」

「うん、その……ありがとう」

「いって、それよりその制服、文月学園の生徒だよな？」

「え？ ええ、そうよ。あなたもでしょう？」

「俺、今日編入するんだ。一緒に行ってくれないか？」

「いいわよ？ どうせならお礼に放課後に校内を案内しましょうか？」

「ありがとう、頼むよ。ところで始業式何時からだっけ？」

「えっと・・・8時45分からよ？」

覚えてたとおりだな・・・。たしかまだ時間があったと思うけど・・・？

「今、何時？」

「・・・！！！！」

「どうした？」

「・・・・・・8時30分」

「！？！？」

まだ、30分はかかるぞ！？

「遅刻だ！！！！」

く出会いく（後書き）

遙生が遅れてたのは桜の見すぎです。

ご感想いただけるとうれしいです。

また、こちらはナギとハヤテと召還獣のサブとなります。ご了承ください。



〜登校〜（前書き）

短いです。これから長文目指してがんばります。

く登校く

side ????

「走るぞ！こつちであつてるよな？」

「ええ、三つ目を右よ！」

私たちは走り始めた。なぜならそこに道があるから。なんてことじやなくて、遅刻しそうだから！

・・・正直体力ないな。部活やってないしね。

「あ！ あつた！！！」

「そつちじゃないわよ！？」

そつちはたしか田んぼよ？ 近道どころか確実遠回りよ！？

「これだ、これ！？」

「自転車？」

「後ろ、乗れるな？」

たしかにやったことはあるけれど・・・。

「誰のよ、これ!? それに二人乗りは道路交通法違反よ!?!」

「まとめて超法規的措置だ! いくぞ!?!」

「・・・わかったわ、お願いするわ。・・・ごめん、助けてもらっ  
た上にこんな・・・」

「いって! けど、校内の案内頼むな?」

「まかせて! とっておきの場所も紹介するわ!?!」

「それは楽しみだ!?!」

私がまたがると、彼は自転車をこぎ始めた。

でも・・・

・・・正直早すぎた。

「ハア、ハア。乗らせてもらっというんだけど、あんたもう少しまともな運転できないの!？」

彼の運転はまるでスポーツカーのように加速して、めちゃくちゃなスピードで車を抜いていくだけでなく、赤信号のときは、ジャンプして飛び越えていった。

時々、通行人も飛び越えていた。

「何とか間に合ったんだから結果オーライ!」

「私、もうジェットコースターで怖がらない気がするわ・・・」

今は駐輪場。

そう、普通30分かかる距離を一分足らずで行ったみたい。だから逆に時間がある。

ほんとに人間なのかしら・・・?

「まだ、安心は早い。とりあえず職員室行くぞ?」

「わかった。でもとりあえず先に名前だけ教えて?」

「そちらから」

「私は、木下優子。助けてくれて本当にありがとう」

「俺は時風遥生。よろしく」

～登校～（後書き）

感想お待ちしています！

く再会く(前書き)

初めての長文でまとめ切れれていません。くご指摘お願いいたします！

く再会く

「そついや、時宮君は剣道部志望なの？」

「いや、違うけど。あ、遥生で言いぞ？呼ばれ慣れてるし」

「そう、わかったわ。じゃあ私も優子でいいわ。でもそれって竹刀袋でしょ？」

・・・遥生君は背中に黒くて細長い袋を背負っていた。中身は棒状のものみたいだし・・・。

「ああ、これは・・・木刀だ」

遥生君は袋を開けると古そうな、赤い木刀を取り出した。

「俺は『剣道』はやったことないしやるつもりもないんだけど、『剣術』は昔からやっててな」

「・・・何か違うの？」

「『剣道』は己を鍛え精神を鍛えるためのものなんだが、『剣術』は純粹に人を殺すために造られたものなんだ」

「は・・・？」



・・・人を殺す？ 何を訳わかんないこと言ってるの！？

「木刀でも、使い方によつて・・・人殺せるんだぞ？」

「そ、そりゃあ知ってるけど・・・」

えっと、マジな空気なんだけど・・・？

「ま、殺ったことないけどな」

「当たり前よ、そんなの！？」

「怒るな、怒るな！」

「まったく冗談でも言っていていいことと悪いことがあるわ・・・ど」  
「から冗談？」

「さあな」

「あんたね・・・」

でも、冗談にしては木刀なんて担いで……。

「それより、職員室はこっちであってるんだよね？」

「そうよ、ここをまっすぐ行って、右に曲がったところの校舎にあるわ」

「さっさと行こう」

「そうね、これで遅刻は泣きなくなるわ」

piece 職員室

「おはようございます、西村先生」

「おはようございます」

「おはよう、木下、時風。……転入生の案内か？」

「まあ……いろいろあってこっちが助けてもらいました。それより封筒ください」

「封筒？」

「文月学園では一人一人にクラスの書かれた封筒を配ってるの」

「また、えらく面倒なことをするんですね」

「まあ、そういうな。この学校は世間に注目されている試験校で、このシステムもその一環なんだ」

「へえ、そうなんですか」

西村先生は茶色の封筒を持ってきてくれた。

「これが、木下ので、こっちが時宮のだ。確かに渡したからな」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます。でも俺って必要なんでしょうか？」

「ただの事務手続きだ。もらっておけ」

「え、どういうこと？」

「俺は振り分け試験欠席したからFクラスなんだ」

「入学試験は満点だったのに、なにかあったのか？」

「まあ……いろいろと……」

文月学園にも入学試験というものがある。めったな点数を取らなきゃ落ちることはないけれど、逆に満点を取ること難しいらしい。

どんな優秀な生徒か、満点を取られてしまつとわからないから。

愛子も、「あれには人類が解けるものじゃないものが混ざってるよつて言つてたっけ？」

「まあいい。それはそうと、時宮には後で校内を簡単に案内しようと思うが……」

「あ、けっこうです。木下さんが今日の放課後にしてくれるそうなので」

「そうか、じゃあ木下頼んだぞ？」

「はい、じゃあこれで。失礼しました」

「失礼しました」

「遙生って振り分け試験、受けなかったの？」

廊下に出ると、優子が聞いてきた。

「ああ。いろいろあったんだ……。それより、どこのクラスになった？」

「決まってるじゃない。私は……」

「Fクラス？」

ビリビリ。袋を開ける。

「……Aクラスよ。まあ、何かあったら訪ねてきて。忘れ物くらいなら貸すから」

「ありがとう。……とここでここがAクラス？」

「そうよ。なかなか広いでしょ？」

「へえー・・・・・・・・・・・・・・・・ホテル？」

そこには、普通の教室六つ分はあろうかという空間に、鮮やかな装飾を施した、まるで帝○ホテルのような気品あふれる部屋だった。

中の生徒は各自、自分専用の冷蔵庫をあけ、お菓子を食べている。

「AクラスからFクラスまで設備が違うのよ。つまり成績によって待遇が違う、この学校は実力主義なの」

「・・・・・・・・つまりはFクラスは逆に・・・・・・・・酷いと？」

「まあ、趣はあるけど・・・・・・・・期待しないほうがいいわ、色々だね。」

「わかった」

「Fクラスは旧校舎だからまっすぐ行って、渡り廊下を渡ってね」

「ああ、ありがとう。放課後は？」

「そうね・・・・・・・・終礼が終わったら迎えに行くわ。Fクラスで待ってて」

「わかった。ありがとう」

「こっちこそ助けてくれてありがとう。それじゃまたあとでね」

「ああ、よろしく」

優子と別れて、しばらく歩くとFクラスの教室が見えてきた。

「ふう、ここがFクラスか……。期待しないほうがいいって言う  
てたけど……」

ま、気にしないほうがいいだろうな。

勉強に必要なものはあるだろうし。

酷いって言うても、使い古されてガタガタする机ぐらいだろうし……。

とにかく住めば都、とりあえず入ろう！

ガラガラッ

目に飛び込んできたのは・・・

物置小屋のように汚れた壁

そこかしこに我が物顔で巣を張るクモ

畳の上に座る生徒

その前にはちゃぶ台

供託は立っているのが不思議

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え・・・・・・・・

「・・・・・・・・失礼しました」

ガラガラ、ピシヤリ・・・・・・・・

えっと、ここは現代？



もう一度、教室を確認した。

『2 - F』

問題ない……………

「ふう、今は気のせいだ」

きつと、優子が言ったのが妄想になって出てきただけだ。

さて、そろそろ入るとするか……？

何も気にすることは……

ガラガラ

物置小屋のように……以下略

(差、ありすぎだろ—————!!!!!!!!)

(え、何これ？ 机や椅子すらないの!?! 一体何があったの？  
ネタ？ 何も笑えないんだけど!!!)

俺がパニくっていると、

「ん、どうした？ 早く入ってこいよ？」

なぜか教壇にいた人が話しかけていた。

あれは、そうだな、動物に例えると……ゴリラ………？

とりあえず……

「あ、すみません、ゴリラさん。」

自由が恋しいのはわかりますが、できれば動物園に帰っていただけるとうれしいのですが……。

さすがに学校で野生動物との共存は難しいかと……」

「俺は坂本雄二、人間だ！！」

「なんだ（本当はわかってたけど……）、俺は時宮遙生。よろしくな」

「おまえな……」

「気にしない、気にしない。ところで坂本、なんでお前教壇にいるんだ？」

「ああ、それは俺がこのクラスの代表だからだ」

「代表？ そんなものあるのか？ 学級委員みたいなものか？」

「・・・お前、試召戦争知らないのか？」

「・・・試召戦争？」

「あ、俺、編入生だから。ついでに振り分け試験出てないからこの学校来たのも三回目によくわかってない」

「ほう、どこから来たんだ？」

「群馬の高霧高校ってしってるか？」

「・・・日本三大有名校じゃなかったか？」

「まあ、一応。上から下までいたしな・・・」

「因みにお前は？」

「上の中ぐらい？ 大体十五番ぐらい？・・・それがどうかした

のか？」

「俺はクラス代表なんぞでな。全員の点数を把握しておきたくてな」

「あ、そうだと、なんなんだ？ クラス代表とか、試召戦争とか・  
」

〈説明中〉

「なるほど、それはおもしろそうだな」

「だろ、やってみたいと思わないか？」

確かにやったら楽しそうだと。点数を武器にするなんて発想ないもんな。

「……でも、断る」

「……とりあえず、理由を聞こうか？」

「それは……」「すいません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

坂本、いきなり……。知り合いなのか？

というか、この茶髪、どっかで見たことあるよづな……。？

「聞こえないのか？ ああ？」

おいおい、親しきものにも礼儀ありっていうだろ……。？

「……。雄二、何やってるの？」

「クラスのメンバーの確認をしていた」

「へえ、てことは雄二がクラス代表？」

「ああ、そうだ。それはいいから理由を教えてください」

あ、そんなこと聞かれてたっけ？

「えっと、君は？」

「明久は黙ってる」

「で、どうし」あの、ちょっと座ってもらえますかね？ HRは  
じめますので」

いつのまにか、冴えないおじさんが来ていた。まさか先生？

「あ、すみません」

「皆さんも座ってください。HRをはじめます」

「坂本、席は自由か？」

「ああ、そうだ」

俺は空いてる席にとりあえず座った。

「え」と、おはようございます。二年Fクラスの担任をすることになりました、福原慎です。よろしくお願いします」

それから、備品についての説明、不備があった場合の対応が始まった。

・・・といつても、設備は卓袱台や座布団で、対応も我慢しろだから、意味ないけどな・・・。

「それでは次は自己紹介でもしましょうか？そうですね、廊下側の人からお願ひします」

福原先生の指名で、生徒の一人が立ち上がった。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属してある」

なんだ、女子？ でも確かに秀吉って？

「ワシは男じゃ」

へえ、ぱつと見たら女子に見えるな。

「……………土屋康太」

お、次は無口そうな奴だな。

髪も目にかかっている。

「趣味はとうさ……、なんでもない。得意な教科は保健体育。よろしく」

ポケットから見えてる機械は、なんだろうなあ？

そんな中次々と回っていった。どうでもいいけど男多いな……。

おっと、次は俺の番か？

「一年の終わりに編入してきた、時風遥生だ。みんなよろしく」

「……………え？　もしかしてハルくん？　（ハルキ？）  
」

ん、ハルくんに、ハルキ？

呼ばれたほうを見ると、さっきの茶髪の少年と、マスクとサンングラスをした女子が見開いていた。

「もしかきて、ハルキ？　…………時風遥生？」

…………俺のこと知ってるのか？

「もしかしなくてもそうだけど…………」

「ぼ、僕だよ！！　ハルキ！！！！　明久、吉井明久！　久しぶり！  
…………！！！」

…………まさか？

「…………アキか？　本当に明久か？　ほんとに久しぶりだな！？」

「うん、二年ぶりぐらいかな？」

「ああ、そうだな！！」

俺とアキは小学校が一緒に、いつも遊んだりやんちゃしたりして、最後には…………。



「あの、自己紹介を続けたいんですが？」

「あ、すみません！ 少し廊下で話してきます」

「わかりました。ほかに話すことは？」

「ありません」

「ではどうぞ、先に進めておきます」

「よし、廊下に出るぞ、明久！！」

「うん！」

・・・止まっていた時計の進む音がした。

く再会く(後書き)

感想お待ちしています!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3590ba/>

---

バカと絆と召還獣

2012年1月14日12時45分発行